

2018年3月 関西大学審査学位請求論文

チーム援助における養護教諭の保護者支援と信頼関係構築に関する研究

関西大学心理学研究科 15D8503 平井美幸

(2017年11月30日提出)

要 約

本研究は、学校心理学におけるチーム援助の理論的枠組みに位置づく養護教諭の保護者支援に焦点を当て、養護教諭と保護者との関係構築の手がかりを見出すことを目的とした。

第1章は、まず、現代的教育課題の実態にどのような子どもの姿をみるのかを指摘した上で、教育改革として導入された「チーム学校」を学校心理学におけるチーム援助の理論的枠組みから説明し、教員の個人要因に考慮したチーム援助を実践する方向性を論じた。次に、「チーム学校」の実現に必要な家庭や地域との連携・協働において保護者に注目し、保護者との関係における諸問題解決の糸口となる関わり方として、チーム援助の始期にあたる保護者支援が重要であることを論じた。さらに、コーディネーターとしてチーム援助を実践的に展開する養護教諭を対象とし、心理学的見地から養護教諭の保護者支援や保護者との関係構築を探究する意義を論じた。

第2章では、対人援助の前提条件といえるラポール形成に着目し、学校の教員－保護者関係における保護者支援の有効性を論じた。その際、養護教諭と母親の類似性から、教育期家族や子どもの母親の課題を踏まえた養護教諭が行う保護者支援の意義を確認した。さらに、養護教諭に対する保護者の援助ニーズが未解明であることを突きとめ、保護者の援助ニーズを追究する必要性を論じた。

これらのことから、「チーム学校」の具体的展開におけるマクロな視点を「関係構築プロセスにおける保護者支援」、ミクロな視点を「養護教諭の個人要因」ととらえ、第3章に本研究の概念枠組みを提示した。そして、(1) 養護教諭と

保護者との関係構築プロセスにおける養護教諭の保護者支援とは何か、それに影響を及ぼす養護教諭の個人要因とは何かを帰納的に解明すること、(2) 関係構築プロセス解明によって引き出される養護教諭の個人要因に着目し、養護教諭が保護者との関わりを促進させる観点を検証すること、(3) 対象を保護者に移し、養護教諭に対する保護者の援助ニーズの実態把握と、母親の背景要因である自己管理スキルとの関連を検証すること、という3つの段階的な目的を設定した。

第4章では、マクロな視点である保護者との関係構築プロセスにおける養護教諭の保護者支援について、「日常の専門職としての保護者との関わりから保護者の信頼感を獲得するに至る独自のプロセスにおける、保護者への個別的な関わりと援助チームの構築であること」と帰納的に解明した。戈木クレイグヒル版GTAの適用によって、保護者との関係構築プロセスにおける養護教諭の保護者支援に関する理論生成を実現した。生成された理論に内包された養護教諭の保護者支援を説明する概念的定義は、「専門職としての日常的な関わりから保護者の信頼感を獲得するプロセスにおいて養護教諭が行う、保護者への個別的な関わりと子どものための援助チームの構築のこと」と示唆された。また、養護教諭としての職業的な倫理観が基盤となって醸成された、保護者や学級担任、養護教諭自身に対する養護教諭特有のビリーフは、養護教諭の保護者支援に影響を与え、関係構築プロセスの鍵概念となる要因に最も重要であるとの示唆を得た。

第5章は、第4章で引き出された保護者との関わりにおけるビリーフをミクロな視点、すなわち、養護教諭の個人要因にとらえ、養護教諭の「特有さ」を備えた保護者との関わりにおけるビリーフの尺度を開発した。保護者との関わりにおける養護教諭特有のビリーフ尺度の1次元は、学級担任・保護者・養護教諭自身に対する役割遂行意図としての期待を意味し、信頼という概念を包含する信念であった。2次元は、他者優先思考を意味する信念であった。また、小中学校経験のある養護教諭が標準的な信念をもつことが示唆された。本尺度のビリーフとは、養護教諭としての職業的な倫理観に立脚した義務的・絶対的な思考が他者を優先しつつ自他への役割遂行期待を高めること、養護教諭が依存的であるほど他者優先思考を高めること、養護教諭が士気高く問題解決を目

指すための前向きなビリーフであることと示唆された。ミクロな視点である養護教諭の個人要因には、保護者との関わりを促進させる養護教諭特有のビリーフに着眼することが有用である確証を得た。

第6章では保護者、とりわけ母親に視点を移し、養護教諭に対する母親の援助ニーズの実態と自己管理スキルとの関連を解明した。母親は、集団全体に子どもへの直接的な健康支援および情報提供することや、個別支援では母親の情緒面に配慮することを求めている。子どもの学校生活が楽しそうでないと認識する母親は自身への情緒的支援を、女子中学生の子どもを養育する母親は子どもの性差を考慮した情動的支援を求めている。自己管理スキルとの関連においては、自己管理スキルが低い母親は、母親自身への情緒的支援を少し求めており、母親の背景要因として自己管理スキルを考慮する必要性が示唆された。したがって、養護教諭は保護者全体に向けた道具的・情動的支援を提供する一方、母親の自己管理スキルの程度を考慮した個別支援を行うという、母親の背景要因に配慮された適切な保護者支援を実践する有用な示唆を得た。

第7章では、養護教諭特有のビリーフに包含される信頼という概念と、保護者の信頼感の獲得による相互作用が、養護教諭－保護者間の関係構築をもたらすという本研究の知見を踏まえ、保護者との信頼関係構築を展望した。保護者との信頼関係構築は、子どもの学校適応や心身の健やかな発育・発達を促す可能性を有していた。それには、教員の資質・能力に裏づけられた温かい教育実践が必要であり、とりわけ保護者支援が有効な手立てとなることを論及した。このような教育実践を養護教諭が行う場合、本研究によって得られた示唆が実際の学校現場における養護実践にどのように有用であるかを言及した。心理学的見地から得られた示唆が、学校における養護教諭の教育実践に多大な貢献を与えるといえる。

以上のことから、本研究の目的を解明し、養護教諭と保護者との信頼関係構築には、学校心理学におけるチーム援助の理論的枠組みに位置づく養護教諭の保護者支援が手がかりになる、という結論を得た。